

■ホワイトボウルへ意気込む北海学園大

北日本大学王座決定戦・パインボウルで東北大を24-14で下して初優勝を飾った北海学園大が、関東大学リーグ1部・ビッグ8優勝の慶応大と対戦するホワイトボウル（12月20日、東京・アミノバイタルフィールド）が迫ってきた。ラン、パスとバランスの取れた攻撃力と、安定した守備力で東北大を圧倒し、波に乗るゴールデンベアーズの選手たち。「打倒関東」を合言葉に半世紀の歴史を刻んできた北海道のアメフト関係者の期待も背に、雪の舞うグラウンドで最後の調整に励みながら、「北日本の代表の力を見せつける」と大一番に向けて闘志をみなぎらせている。

11月23日のパインボウル終了後、3度目の合同練習日となった12月5日。札幌市豊平区の北海学園構内にある人工芝グラウンドに北海学園大アメフト部の選手とスタッフ合わせて50人余りが集合した。午前9時の気温は3度。グラウンドの周囲には積雪も見える。本間航史主将（4年）が「試合まで2週間。しっかり準備しよう。目標は勝つこと」と檄を飛ばし、練習が始まった。

ポジション別に分かれてウォームアップ、基本トレーニングなどが続く。QBとWRのグループでは、パインボウルMVPのQB小笠原文瑠（2年）が力強いパスを投じた。攻撃チームのフォーメーション練習ではRB阿部龍太郎（4年）が小気味よいステップを見せ、守備チームの練習ではDL坂本大弥（4年）らが鋭く踏み込み、LB竹内佑至（4年）が仲間を鼓舞する大声を響かせた。主務の畠山真依（4年）らスタッフもボールの用意や給水などでグラウンドを走り回った。

練習は約3時間で終了。攻撃チームに付きっきりで指導した高木幸樹ヘッドコーチが、終了のハドルで「今の時期、日本中のチームの9割以上がフットボールをやりたくても出来ないのに、われわれは出来る。こんな幸せなことはない。だからもっとアメフトを楽しもう」と呼びかけ、これにこたえるように選手たちの雄叫びが上がった。



1973年創部の北海学園大は過去に2度、関東の大学と公式戦で対戦している。北海道学生選手権に初優勝した79年と連覇した80年。甲子園ボウルの東日本代表校を決める関東選手権に道代表として出場し、ともに1回戦で神奈川大と対戦。79年は7-27、80年は14-15で惜敗した。今回のホワイトボウルは、コロナウイルスのために全日本大学選手権が中止になり、北海道から甲子園ボウルへの道が絶たれたことから、その救済措置として設けられた交流試合だが、北海学園大にとっては40年ぶりの関東代表との公式戦対決になる。



対戦相手の慶応大は1947年の第1回、49年の第3回甲子園ボウルで優勝した名門チームだが、本間主将は「相手も同じ学生。北海道、東北のフットボールの力を見せたい。ラインの勝負になる」と必勝を決意する。攻撃の柱のRB阿部も「ラインのブロックを信じて、独走でTDを取る。ランで進み、要所でパスを決める」と強気のゲームプランを描く。司令塔のQB小笠原は「北海道にもこんな選手がいるんだと言われるプレーを」と虎視眈々だ。

カギを握る守備チームも意気盛んだ。パインボウルで最優秀守備ラインに選ばれたDL坂本は「慶応大の攻撃ラインは強いが、味方のLBを生かすプレーに徹する。守備が踏ん張り、最少失点で攻撃チームに渡したい」と宣言し、同じくパインボウルの最優秀守備バックスのLB竹内は「要所でのタックル。インターセプトも狙う。どんな時もフィールドで声をかけ、士気を上げる」と決意する。パス守備のかなめのDB長谷部悠（4年）は「ビデオで慶応大の攻撃をとことん分析し、アジャストする。関東に北海学園大の爪痕を残す」と力を込める。

そしてスタッフも。主務の畠山は「選手の体調管理など、今までやってきたことをしっかりとやりたい。選手には北日本代表として恥ずかしくない試合をしてもらい、スタッフも『さすが北海道』と言わせたい」と闘志を燃やしている。